まちのほいくつうしん

第二号
二〇二〇年
九月号

ほいくのこと

「まちってなあに？」始まりました！ 代々木上原園の実践から

前号にも載せておりましたが、今年、まちの保育園・こども園では、全園共通の探究として「まちって何（なあに）？」というテーマを設定し、それぞれの園で探究を進めています。この号では、代々木上原園の実践をご紹介します。

新型コロナウィルスの感染拡大のため、園は渋谷区の方針により、四～五月は完全休園になりました。六月に園が再開されてからは、ほとんどの子どもたちがこれまで通り通園できるようになりましたが、まずは集団生活の感覚を取り戻すことを第一に、生活習慣、身支度の確認や、子どもたち同士の関わりを見守ることを丁寧に進めました。

八月に入り、クラスも落ち着き、いよいよ「まちってなあに？」の探究が始まります。

まずは五歳児のクラスからスタート。朝の集まりの中で、保育士から子どもたちに、「まちってなあに？」という声も。

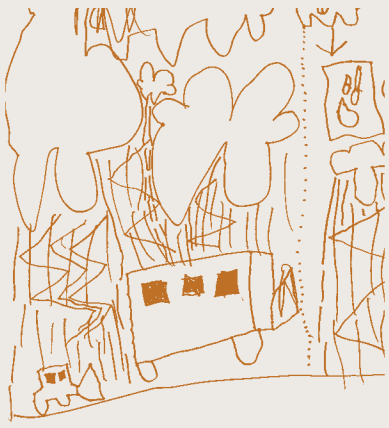
また、これまで集まりの中で九州の豪雨の話などをしていたから、自然現象に興味がある子どもたちも多く、「まちにはビルがたっている。」→「まちのしたは つちでできている」→雲→雷…と天気の話にも発展していきました。

まちを絵で表現してみよう

次の週には、「まちを絵に描いてみよう！」という話になり、興味のある子どもたちが中心となり、自分たちの考えるまちを絵で表現してみました。ビルの絵を描いた子どもが多かったのは、渋谷区の子どもたちならではでしょうか。

少し、子どもたちの声をご紹介します。

「まちは、あそこ」「まちは、ここだよ」
「まちは、おそら。まちは、おはなの」
「きも かいていい？」
「まちって、ひとがすむところ。こどもが たくさんすんでいて、くるまで いったら おみせがあって、どうろがあって、まがったら こんびにで、まっすぐ そのままいったら つぎに こっちにまがって、そのはしっこに。そのうしろにも いえが ある」
「びるを かくのは、つかれるんだよ。ほら。たのしいけど、こんなにかくの むずかしそうだ」



子どもたちの表現や絵はドキュメンテーション（子どもたちの学びのプロセスを文章と写真などを中心にまとめた書類）にまとめ、職員室にも貼って、保育者同士でも意見や感想を共有しあっています。

広がる、深まる、まちの探究。子どもの表現。

子どもたちの表現の方法は絵だけではありません。前々から、木で鳥の巣箱をつくったり、紙と廃材を組み合わせて緻密に制作をしたりと、もともと、制作が好きな子が多いクラスです。まちの表現は立体に移っていくのか、暑さも和らいでくる季節なので、外に出るのも良いでしょう。実際に代々木上原のまちを散歩して、対話を深めたり。商店街の方にも関わってもらえるかもしれません。

これから他のクラスでも、「まちってなあに？」の探究が始まります。引き続き、いろいろな方面から、子どもたちとまちを探究していきたいと思います。どんな表現が生まれるのか、とても楽しみです。

保護者とつくる

よよぎこうえん

コロナ禍で生まれる、代々木公園の〝保護者とつくる〟の新しいカタチ

代々木公園の、「保護者とつくる」の姿。

それはまさに、このコロナ禍でリアルに感じることができたように思います。

これまでも、保護者の方とは日常的に子どもの育ちを共有し、文化祭、絵本の会、代々木公園で焼き芋を食べるイベントなど、繋がり合う機会を様々持たせていただいてきました。

その中で起きた、この未曾有の事態。

園は、区の方針で四月～五月は完全休園になり、その間、「保育を継続する」という想いで、様々な発信を行ってきました。Zoomを使っての保育「おうちでこども園」、YouTubeでの発信。有志の保護者と活動している軽音部では、園のうたのリモート演奏も。

日々試行錯誤し、様々なことを行いましたが、これらは全て、保護者のご理解・バックアップがあってこそ成立したものです。改めて、ご理解とご協力に感謝申し上げます。

休園が解除になった後、七月七日の七夕の日にコロナ終息への願いを込めて、オンラインで「新型コロナウィルスへの対応に関する懇談会」を開催しました。園としては勇気がいったのですが、現在の対応の共有に加え、私たちの感じている想い、苦しい状況も率直にお伝えしました。保護者からは、職員の心身への配慮の声をかけてくださった方も多くいらっしゃり、本当に有り難く、涙が出そうでした。

このウィルスとの闘いはまだしばらくは続きそうです。

園としての予防の徹底、子どもたちの経験の保障、保育内容の共有についてなど、継続、改善することはたくさんあります。保護者の皆様にも、ぜひいっしょに園をつくり、育てていっていただけたらと思います。

園紹介

第二回　まちの保育園　小竹向原

二〇一一年四月一日　東京都認証保育所として開園
二〇一五年四月一日　認可保育所へ移行
定員八〇名

小竹向原園は、まちの保育園・こども園の一園目として二〇一一年に開園しました。

園のある小竹向原のエリアは、閑静な住宅街かつ、大学も多く文化的なエリアで、都心へのアクセスが良い割に、緑も多く、穏やかな空気が流れています。

園内は自然の素材を中心に落ち着いた色使いとなっており、保育室内の環境は保育者が日々話し合い、子どもの興味関心に即して変化しています。活動を支えるアトリエや、素材庫、ランチルームもあります。園の隣には、カフェ「まちのパーラー」も。毎日たくさんの地域の方が訪れており、地域との接点になっています。

保育の中では、子どもの意見・考えを尊重し、大人だけでなく、子どもも含めて、みんなで考えていくことを大切にしています。大事なことは「対話」によって決めていきますが、正解不正解にとらわれずに発言ができるよう、私たち大人が安心できる存在でいられるようにと意識しています。子どもは第一発見者です。子どもの意欲や姿に寄り添いながら、探究活動をゆったりと見守り、プロセス主義でありたいと考えています。

自分を大切にできること。自分たちがいるところを、自分たちで良くしようと思うこと。

自己肯定感とともに、互いのことを認め合う感性を育み、この園での多様な経験や出会いを通して、自分なりの幸せを見つけられるような子どもに育ってくれたらと願っています。

キッチンとつくる

きちじょうじ

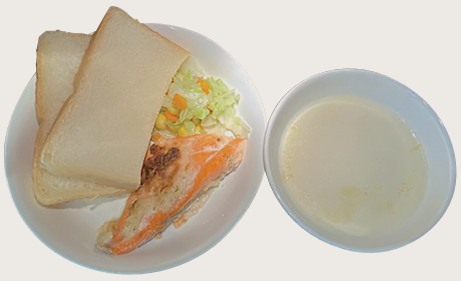
吉祥寺園は定員六〇名と、まちの保育園・こども園の中では一番小さな園です。限られたスペースではありますが、その分、子どもたち・保護者・職員間の距離感が近く、アットホームな園だと感じています。

給食室は玄関を入ってすぐのところに。サンプルケースや献立の掲示もいっしょにあり、子どもたちや保護者の方に声をかけたり、コミュニケーションが取れるのが嬉しいです。

給食の中では、自然や季節を感じることを大切にしています。園の屋上に畑があるのですが、そこで収穫したものをすぐに給食に取り入れたり、夏にはスイカ割りをしたり。枝豆をあえてそのままの形で八百屋さんから納品してもらい、枝豆が枝になっている様子や、花の様子をみんなで観察したこともありました。

給食室はこもりがちなところではありますが、行き帰りや事務仕事中に子どもたちに声をかけたり、時には保育室に入ったり。日常的な繋がりを大事にしたいと思っています。

まちの保育園・こども園の人気レシピ



第２回　吉祥寺園

「鮭のマヨポテト焼」

約子ども1人分

＜材料＞
鮭 50 g
料理酒 1.0g
食塩 0.1g（鮭の下味用）
じゃが芋 15g
玉ねぎ　10g
なたね油 1.0g
食塩 0.1g（味付け用）
マヨドレもしくはマヨネーズ 3g
パセリ 0.1g

＜作り方＞
①じゃが芋の皮をむき、茹でてつぶしておく。
②玉ねぎは薄くスライスし、塩をふり、水分を抜いておく。
③①と②を混ぜ合わせ、マヨドレ、パセリ、塩を加えて味付け。
④料理酒と塩をふった鮭の上に③をのせ、220℃のオーブンで 20-30 分焼いてできあがり！

＊焼き時間はオーブンや鮭の厚みによっても異なるので、調整してくださいね。

地域とつくる

ろっぽんぎ

都心の中でも、子どもが子どもらしく！六本木園の考える、コミュニティづくり

園のある六本木一丁目エリアは、大使館も多く、文化的・国際的なエリアです。

かつて、園には「まちのガーデン」というものがありました。懐かしく感じられる保護者の方もいらっしゃるかと思います。砂利敷の未利用地をお借りして、コミュニティガーデンを保護者、地域の方と、一から開墾したものです。大きな砂場と、日当たりがよく毎年豊作のコンテナガーデンがあり、園の文化、コミュニティ活動の中心にありました。

その後、このエリアの開発も始まり、「まちのガーデン」はなくなってしまいましたが、相変わらず、この六本木の地域で「子どもが子どもらしく遊べる機会、過ごせる場をどう保障していくか」は園の大事なテーマです。

開園間もない頃からお世話になっている地域の方に、近隣の植栽を担当されているガーデナーさんの存在があります。今年から、分園の軒下にコンテナガーデンをつくり、野菜を育てていますが、野菜やプランターのお花の手入れまで、長く子どもたちの活動を支えてくださっています。このコロナ禍でしばらく活動をお休みしていましたが、今月から活動再開です！

また、この分園の軒下、ちょっとしたコミュニティスペースとなっています。

おなじみのカフェ「まちの本とサンドイッチ」。夏は朝顔のグリーンカーテン、青虫がいっぱい！のみかんの木、そしてピーマンが豊作だったコンテナガーデン。園だけでなく、地域の子どもたちにも、卒園児にも。大人気のスペースです。

新しくまちがつくられていく中ですが、私たちの園やカフェがあることで、少しでも、人の繋がりに貢献できればと願っています。

レッジョ・エミリアと日本の架け橋に。〝JIREA〟がスタートします！

一〇月にレッジョ・エミリア教育アプローチのための日本組織JIREA（じれあ・Japan Institute for Reggio Emilia Alliance）が結成されることになりました。私たち、まちの保育園・こども園と、東京大学教育学部教育学研究科が発起人となりますが、公的な性質をもつ機関として、広く、日本でレッジョを学び合うネットワークをつくったり、レッジョ（あるいは、レッジョがネットワークしている世界の国々）と日本の架け橋となる組織です。詳しくは一〇月頃オープンするサイトにてお伝えできればと思いますが、先んじて、皆様には、この場で、シェアさせていただきたいと思います。

まず、レッジョのお話からさせていただきたいと思います。私たちが、レッジョ・エミリアのアプローチに魅了されている大きな点は、教育が、固定化されたもの（Fixed）ではなく、常に、成長し続けている（Growth）点です。自分たちのやり方・あり方を問い続け、教師だけでなく、子ども達はもちろん、保護者や、まちに暮らす市民の「参加」から、教育をアップデートし続けていることです。この挑戦を七〇年以上も続け、いまもなお、世界で〝先進的な教育〟として、レッジョが注目されていることは、驚くべきことと思います。そして、素敵だなと思うのは、例えば、レッジョを訪れ、まちの人に「どこの学校が一番か」と聞けば（この質問はナンセンスと承知しながら）、大半の人が「自分の出身校」をおすすめしてくれることです。多くの市民が、自分の学校（コミュニティ）を誇りに思っているということです。

「共同性」と「創造性」

レッジョ・アプローチの特徴は「共同性」と「創造性」として語られています。私は、それがレッジョがGrowthし続けるポイントと考えています。

まず、「共同性」とは、シンプルに言えば、コミュニティの「参加」と理解していいでしょう。例えば、レッジョの園・学校内には、広場（ピアッツァ）があり、そこで、子どもも大人も日々交流します。とにかく、何でもお話しします。子ども達のことはもちろん、自分たち自身のこと、政治のこと、好きなサッカーチームのこと、社会のあり方も。この「対話文化」が、レッジョの大きな特徴です。あらゆる対話を重ねて、民主的に自分たちの社会を形成しているのです。そして、大事にしているのは「市民」としての子どもの参加です。子どもの意思・考え・アイデアが、いつも尊重されています。それは園・学校内だけのことではなく、まちのあり方や、市の政治的な方向性にまで影響したりもします。

次に、「創造性」。レッジョの子ども達の表現・思考・関わり・姿勢、そして、学校の環境をみれば、たちまち、誰もが感じとれてしまうと思うのですが、人が本来持つ力や、可能性が発揮されるために、レッジョがずっと大事にしてきたことと言えるでしょう。

〝「子どもは一〇〇をもって生まれてくるが、学校の文化はそのうち、九九を奪う。学校の文化は一〇〇のものはないと子どもに教えるが、子ども達はこう言う。『冗談じゃない。一〇〇のものはここにある』と」〟

伝統的な教育に対する痛烈な批判を、詩に綴ったレッジョ・エミリアの『子ども達の一〇〇の言葉』は、世界中に広がりました。この「一〇〇の言葉」のための学校として、「創造性」が中心的なアイデアとなっています。

学ぶことと、創造することは、ほぼ同義に考えられており、それを象徴するかのように、どの学校にも「アトリエ」があり、美的な感覚が意識され、デザインシンキングという言葉ができる前からそれを実践し、「プロジェクトアプローチ」（プロジェッタチオーネ）で子ども達の探究を深くしています。藝術的なバックグラウンドのある「アトリエリスタ」と、教育学的知見を深く持つ「ペダゴジスタ」がいること。教師・子ども・保護者・コミュニティの〝共創〟関係。子ども達の「創造性」は、学校・コミュニティの「創造性」と相互に影響していると感じさせられます。

JIREA JAPAN INSTITUTE FOR REGGIO EMILIA ALLIANCE

開かれた学びの場を目指して

さて、レッジョ・エミリアは、自らのGrowthを支える「共同性」と「創造性」を、「市内」のみで完結させず、あらゆる文化圏・国々との対話から発展させる挑戦をしていると言えます。それが、「レッジョ・チルドレン国際ネットワーク」で、現在、世界三四カ国が加盟しています。私たちは、その日本の窓口として、東京大学と共に参加しています。これまで、シンポジウムや展覧会の開催、レッジョから人を招き、対話や研修等を行ってきました。現地視察ツアーも行なっています（私たちの園の職員も毎年参加）。せっかくのレッジョと日本の縁ですから、もっと公的に、開かれたフォーラムにして行きたいと、関係者と相談し、日本でレッジョ公認の組織をつくって行くこととし、JIREAが立ち上がることとなりました。

JIREA自体も「共同性」と「創造性」を大事に、日本でのネットワークづくりや、レッジョ他世界の国々との共創を楽しんで行ければと考えています。そして、この挑戦と機会を、まちの保育園・こども園のために活かして行きたいと思います。皆様にも、今後、情報をシェアさせていただき、レッジョとの関係を、園の子ども達につなげる、アイデア・想像を膨らませていけると素敵だなと思っております。

夜は、すっかり、秋めいて来ましたね。毎年感じていることがあります。秋は、子ども達の育ち・学びにとっても「実りの秋」だなと。この状況下、安全にも気を配りながら、子ども達にとっての実りの秋を、園で私たちが、じっくりと感じあっていけたらと思っています。

まちの保育園・こども園
代表　松本理寿輝

お知らせ

記事内でもご案内をさせていただきましたが、この10月より、レッジョ・エミリア教育アプローチのための日本組織JIREA（じれあ・Japan Institute for Reggio Emilia Alliance）を開設することになりました。
10月23日に、オープニングシンポジウムを行います。詳細はJIREAウェブサイト（10月上旬公開予定）並びに、まちの保育園ウェブサイトにてお知らせいたします。よろしければ、ぜひご参加ください！

まちのほいくつうしん

「まちのほいくつうしん」について

この、「まちのほいくつうしん」は保護者の皆さんと、地域の皆さんと、私たちに関わってくださっている全ての皆さんと、いっしょにつくっていきたいと思っています。取り上げてほしいこと、お気づきの点、ご感想などがありましたら、お気軽にお寄せいただけますと幸いです。よろしくお願いいたします！

発行日：2020年9月30日　編集・発行：ナチュラルスマイルジャパン株式会社 まちの保育園・こども園　アートディレクションとデザイン：Donny Grafiks
ナチュラルスマイルジャパン株式会社 本社部門　〒176-0004 東京都練馬区小竹町二丁目40番4　E-MAIL：machihoiku@machihoiku.jp　TEL：03-6447-4471
© NATURAL SMILE JAPAN, Inc. 2020　Printed in Japan